G—4 家庭科教育における指導内容の変遷（第3報）——住居領域について——

大阪教育大　新福祐子

目的　家庭科教育の中で，住居指導のあり方を歴史的立場から追求しようとするものである。すでに明治，大正，昭和戦前について報告をしたが，本報においては現行の基盤となった昭和20年代の教育内容について検討したもので，この時期における住居指導内容の衰退の原因を追求し，今後の復活への方向を考えたいのである。

方法　昭和22年以後の中学校・高等学校用家庭科教科書を分析することにより，その内容の比較検討を行ったものである。

結果　明治以来，住居は家事科の中で導入および主等という立場に据えられ，大正から昭和にかけてそれにふさわしい内容が充実してきた。ところが戦後は，中学校においては職業という教科の中に家庭科を含める立場がとられた。これは戦前の家事科の性格を相当に違えるものである。職業科は実生活に役立つ仕事を教え実践する教科として登場し，各分野からこれにふさわしい内容をと招集がかけられた。ところが当時この指導原理によりつつも，衣・食は旧態依然たるものがそのまま内容としてもちこまれ得たが，住ははいらなかった。昭和22年の家庭科は，わが国の家庭像にもとづく指導をやめて，生活の問題解決型学習形態から出発した。いわゆる生徒中心の立場であるため，家庭科のもつ専門性といったものはかえりみられない結果となってしまった。中学校における家庭科が他の教科と共存する限り，その独自性は十分に発揮できないのである。

出発点においてあまりにも仕事という観点で住居の指導内容を律してしまったことに，現在の住居指導の貧困さと戦前との断絶の原因があると考える。